



485 講談社現代新書

# 続 考える 技術書く技術

情報が氾濫するなかで、目的にかなった材料を収集し、整理し、文章に表現することは、むずかしい。

なぜ考えていることがそのまま文字にならないのか。人を説得し、感動させる文章はどうしたら書けるのか。

大好評の前著につづく本書は、三段階法、パンチのきかせ方、30—3—30の認識など、

だれでも習得できるコツと技術を、先達のエピソードなどをおし、教えてくれる現代人必携の書。

板坂元



とがある。地球上の人類を二十四回全滅させるだけの核兵器を保有している国が、相手国の保有量が二十五回分になったから我が方ももう一回分増やす必要がある、と考えるのはコッケイである、と。コッケイというか狂気というか、聡明な政治家たちが、そういうことを真剣に考えているから不思議な話である。が、それはともかく、人類を二十四回破滅させる核兵器を持った国の方が二十五回分持った国より人道的であるというわけにはいかないはずである。

ミグ25と石川五右衛門と核兵器保有と、もし人道論議をするとき、数量的な問題を考えに入れないければ、やはり錯覚におちいることになる。

さいきんアメリカ政府がサッカリン禁止に踏み切ったが、根拠にした実験はカナダの科学者が発表したもので、アメリカ側の学者からは、きびしい批判が出ている。というのは、実験動物に大量のサッカリンを与えたらガンが発生したというが、人間が摂取する量は、それよりもはるかに少量であって、有害と即断してよいかどうか疑問があるのだ。たとえば、動物に大量の食塩を与えて悪い結果が出たから、食塩の販売を禁止しようという考えにカナダの実験は似ている。まだ正確な資料を得ていないので、何ともいえないが、かなり疑問のある実験である。ここでも量の問題が無視されているのではないか。

こういう思考法については、ダレル・ハフの『統計でウソをつく法』(講談社ブルーバックス)

人をひきつける

以上の心がけは、読む人の注意をいかに引きつけいかに強い印象を与えるかの問題だが、この背景として30—3—30ということを紹介しておこう。30—3—30とは、三十秒・三分・三分のことである。最初の三十秒は、それだけしか文章を読んでもくれない読者が多くいるという意味。したがって三十秒の間に何かを読者の頭に植えつける努力をしなければならない。つぎの三分は、三分くらい文章につき合ってくれる読者のこと、小さなパンフレットくらいの長さなら、さっと読んでくれる読者である。最後の十分は、相当な時間をさいてくれる読者。これは、ていねいに細かなところまで読む人たちだ。たとえば、新聞なら見出しだけを、読む人が30、つぎの3はリード（英国でいうイントロ）を読んでくれる人、最後の30が記事を読んだ人たちだ。本でいえば、表紙や題・目次などを見る人が30、見出しや書き出しの部分を読む人が3、何頁か読み進む人が30というわけである。

アメリカのジャーナリズムで教えることなのだが、文を書くときに常にこの30—3—30を頭

に置いていないと、読む人がつき合ってくれなくなる。われわれは週刊誌などを読むときに、このパターンに無意識にしたがっている。一頁から終りまで、おなじ調子で読む人は、おそろくほとんどいないはずだ。バラバラとめくって、目についたところに立ちどまる。これが、はじめの30にあたるわけだ。それで面白いと思ったら、大きな活字で組んであるかゴジックの活字で組んである部分を読む。これが3にあたる。もし、さらに興味が湧けば、つぎの30の段階に入って全文を読み通す。週刊誌ジャーナリズムは、必死になって、30分まで読者を引きずろうとするわけだが、アメリカの週刊誌の方が、この技術に関して技術的にすぐれている。日本の週刊誌は、30—3—30をはっきり頭において編集しているのか疑わしいものもあるようだ。

それはともかく、文を書くときも、やはり30—3—30を考えて筆を進める必要がある。何とかして30を3に、3を30にしようとする努力することも大事だが、書く内容を「これは3だ」「これは30分だ」という風に分けて、内容に応じて書き分けるようにするべきだ。一頁か二頁のコラムに、盛り沢山の内容をつめこんでもゴテゴテした印象を読者に与えるばかりだし、わずかな量にしかならないものを水増しして引きのばしたら、間の抜けた文ができあがる。新聞や雑誌のコラムや社説など、気をつけて読めば、30—3—30の技術を身につけた人の文章は、読ませ

じく、30秒で人を引きつけなければ、バツとスイッチを切られるか外のチャンネルに変えられる、というセツパつまったところで、人を引きつける技術を身につけた人たちだ。また、週刊誌のトップ屋を経験した人で作家になった人も少なくないが、やはり読者に読ませなければ、つぎの仕事にありつけない、というキビシイ世界に生きていた人たちには、読ませる技術をみがき上げているのだ。アメリカでは、雑誌などに投稿して論文・随筆・小説などを売りこむのが普通に行なわれているが、そういう際の心得として、まず「書き出しの五十語から百語で編集者の興味をひきつける」のが、強調されている。そこで退屈させたら先を読んでもらえないからだ。日本も同じことなのだ。

書くからには、30秒を3分に、3分を30分に引きのばす、という意気ごみが必要だ。読む人は、**事実の面白さ**、**解釈（筆者の意見）の面白さ**、**文体（話術）の面白さ**の三つのどれか、あるいは三つともを求める。そのどれで引きとめるかを、常に頭において「これでもか、これでもか」と思いながら筆をとるべきである。

引きずりこむ

『ニューヨーク・タイムズ』は、世界一流の新聞だが、あの新聞でさえ編集部が自由にできる

泣くことも出来なかつた。

文章を書くときは、読者の頭を抱えこんで、食いしばっている歯の間から、羊羹を細い棒のようにしてでも押しこむ気構えで筆をとるべきではなからうか。

#### 4 — 練習

##### 名文を読む

最後に、文章を書く練習法について、私の実行していることを披露してみる。まず、名文を読むこと。何十何百となくある本の中から、自分の好きな本を何冊か選んで機会がある毎に読む。古今の名著であつてもよいし、ジャーナリスティックな文章でもよい。また、好きな本をどんどんとりかえても構わない。要するに何回もくり返して読むことである。私は、ひところ、山口瞳の江分利満氏を製本がバラバラになるまで読んだことがある。二年前くらいに青木雨彦を集中的に読んだし、田辺聖子を徹底的に読みあさつたこともある。魯迅は二十何年、中野重治は中学生のころから、森鷗外・斎藤茂吉・志賀直哉などは、興味が湧くごとに二ヶ月くらい集中的に読んでいる。この本に引用した本の大部分は、そういう風にしてつき合つた本である。

ある。

英語ではジョージ・オーウェルを読んでいる期間がもつとも長い。主観的な意見といわれる

かもしれないが、オーウェルの英語は、知的で明晰という点では、現代最高のものだと思う。

私は頭がたるんで、物がうまく考えられなくなつたら、かならずオーウェルを読むことにしている。エッセーなど何十回読んでも飽きない名文章だ。

尾井基次郎が志賀直哉の小説を一字々々原稿